文部科学省挨拶

髙木義明
（文部科学大臣）

平成 22 年度青年海外協力隊等派遣現職教員特別研修・帰国報告会の開会にあたり、文部科学省を代表してご挨拶を申し上げます。

青年海外協力隊は見ず知らずの土地で、見ず知らずの人達と生活を共にし、その国の人々のために国際協力活動に従事する、「顔の見える支援」として高く評価されています。国とは人であり、個々人の活動の総体が国の勢いを表すことから、この国を元気にしていくために、一人でも多くの方々に世界に飛び出していって頂きたいと思います。

私も、『日本の国際協力－特に青年海外協力隊の活動－を支援する国会議員の会』の会長として、青年海外協力隊に注目しており、最近、若者の内向き志向が指摘される中で、こうした現状を変えていくための素晴らしい仕組みとして、推進に努めております。

本年 6 月には、『内閣総理大臣主催　青年海外協力隊帰国隊員による報告会』が、総理官邸で開催されました。菅総理大臣、仙谷官房長官、岡田外務大臣に私も参加して、帰国された隊員約 150 名の方々から体験談をお聞きしました。

報告会では、モザンビークに赴任された教員の方から、「理数科教師として派遣されたが、物が無くて苦労した。しかし、ペットボトルや空き瓶など身近にあるもので工夫しながら活動を軌道にのせていった」と報告があり、言葉だけでなく、文化や風習も違う厳しい環境の中で様々なご苦労をされた様子が伺えました。同時に、話し方や表情から、自ら困難の中に飛び込み、それらを乗り越えてきた達成感と自信が感じられ、大変頼もしく、また嬉しい思いでお話しを伺いました。

文部科学省と致しましては、青年海外協力隊の中でもとりわけ現職教員特別参加制度に期待を込めております。

教員の方々が開発途上国において、現地の方々と生活を共にしながら様々な障壁を克服することを通じて、問題への対処能力や指導力など教員としての資質能力を向上させることにつながるものと期待しています。教員の方々は、帰国後子ども達を教育する立場に戻られます。開発途上国での異文化体験、外国語能力を日本の教育現場で活用することで、一人の経験が何十倍にも、何百倍にも広がっていくことが期待できるからです。

これから派遣される皆様におかれましては、本日披露される先輩方の取組事例や活動経験、組織的支援体制についてご理解頂き、これらを活用して各国の現場で積極的に活動して頂き、大きな成果を上げて頂くことを期待しております。

また、帰国された皆様におかれましては、開発途上国での活動の成果を教育現場で一層ご活用頂くとともに、ご自身の貴重な経験を一人でも多くの子ども達に伝えて頂くことを期待しております。

現在、文部科学省では、JICA・各都道府県教育委員会・大学などと協力して、教員の開発途上国での経験を日本の教育現場で一層活用していくための組織的支援体制の充実に努めているところです。今後も、情報提供やネットワークづくりにご協力を頂きますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本会の実施に当たり多大なご支援を頂きました独立行政法人国際協力機構、開催にご尽力を頂いた国立大学法人筑波大学の方々に対して、深く感謝申し上げます。ここにお集まりの皆さま方のますますのご健勝とご活躍を祈念致しまして、私の挨拶とさせて頂きます。

（文部科学省 大臣官房国際課長 池原充洋 代読）